

トランスフォーマー目  
が覚めたらデストロン  
ガー！？

オカタヌキ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目が覚めると見知らぬ森の中。死んだ記憶も神に会った記憶もないが気付いたらデストロンガーのアイツになっていた。そんな主人公が頑張ってアドベンチャーの世界を生き延びる話。

# 目次

目覚め	1
遭遇	6
誤解	10
乱闘	15
仲間入り	21
影	27
ならず者	32
カラス	38
裏切り?	44
対面	50
相棒!?	54
硝煙	58

候補生の心



# 目覚め

「……………あれ？俺なんでこんなところ？」

目が覚めたら見知らぬ森の中で寝転がっていた。自分でも何言ってるんだろうと思うけど事実なんだからしょうがない。

「……………とりあえず起きようか」

俺は体を起こそうと両手を地面につくのだが…

「あれ？俺の腕ってこんなにメカメカしかったっけ？」

俺の目に映った俺の両手はメカになっていたのである。藍色と白のツートンカラーでなにやらヒレのような突起物がついている。左手にいたっては4つの鍵づめが四方から生えたロボットアームになっている。そしていざ起き上がって見ると…

「……………なんか視界が高くなってる。」

そうなのだ、俺の身長は178cmとわりと高めなのだが、今の俺はその3、4倍はあろうかという高さなのだ。それに、今気付いたのだが、どうやらメカなのは腕だけではないっぽい。首から下を見たのだが、全身がメカになっているのだ。恐らく顔もそうなのだろう。藍色と白、所々黄色の入ったカラーリング。背中にはなにやら大きな4枚の

突起物。胸の装甲はサメの頭を思わせる。ロボット、特徴的な左手、カラーリング、そしてサメ……思い当たる節が一つある

俺は駆け出した。俺自身かなりテンパっていたのだ。そして水溜まりに映る自分の姿を見た。

「……ゲルシャーク……」

そう、俺はトランスフォーマーカーロボットに登場する『牙提督ゲルシャーク』になっていたのだ。

ゲルシャーク、トランスフォーマーカーロボットに登場するギガトロン率いるデストロンガーの副官。最初は知的な参謀格だったが、回が進むに連れて段々ドジが目立つようになり、あとから入ってきたコンバットロンに立場を奪われ、作中の扱いは散々だったが他のデストロンガーが捕まった中で唯一地球に残り、アニメとしての扱いは優遇されていたキャラである。俺はそんなゲルシャークに生まれ変わっていたのだ。……死んだ記憶はないが

「ということはここはカーロボットの世界なのか？ いや、ゲルシャークはデストロンガーの副官だったはず、そんなやつがこんなところに一人でいる訳がないな……アニメの終わった後の世界なのか？ それとも他の時間軸の世界か？……」

何にせよじっとしていても仕方ない。俺はとりあえず周辺を散策してみることにし

た。



あれからしばらく経ったが、未だに森の中である。すると、遠くの茂みの中に、なにやら機械的なものが見えた。近づいて見るとそれは薄青色のちようどトランスフォーマーが一人入りそうなポッドだった。というかこのポッド、何処かで見たような……あっ！

「アドベンチャーか？」

俺が思い当たったのはトランスフォーマーアドベンチャー。海外ではプライムの続編に当たり、主人公のバンブルビーの率いるチームが地球に墜落した監獄船から脱走したデイセプティコンを力を合わせて捕獲するというストーリーだったはず。てことは俺も脱走した囚人だったのか？やだなあ何やらかしたんだよ俺。

「……待てよ、確かこの世界でのデイセプティコンのエンブレムには囚人用の追跡装置がついていたはず。ということとはまさか!!!？」

俺は急いで胸のマークを確認するが、あったのはデストロンガーのエンブレムだった。よかった、とりあえず囚人ではないようだ。まだ何もしてないのに捕まったら冗談じゃない。

俺はひと安心して目の前のポッドを調べる。まだ開いた様子はない。ということはこの中にはディセプティコンの囚人の一人が入っているという事だ。さくてどうするか？

オートポットに引き渡す？そもそも何処にいるのかわからない。というか、いきなり出てきたやつをおいそれと信用する訳がない。俺みたいな悪人面じゃあなおさらだ。

解放して味方につける？大人しく協力してくれるかどうか怪しい。というか囚人という時点でろくな奴ではなさそうだ。それに追跡装置が作動してオートポットがやってくるかも。スチールジョーはエンブレムを引き裂いて追跡装置を破壊していたが……

俺は悩んだ末開けることにした。協力してくれるならスチールジョーみたいにエンブレムを引き裂いてやればいい。襲ってくるならやって来たオートポットに協力してこれを口実にチームに入れて貰おう。詳しく聞かれたら最悪記憶喪失ということにしておこう。

そして俺はポッドの開閉スイッチを押した。





## 遭遇

プシュツ！と空気の抜けた音が鳴り、ポットのハッチが開く。

「カアアアア…ウウン…こは？」

中に入っていたのは、赤と黒のカラーリングをした細身のトランスフォーマーだった。両足には鳥のような鋭い爪があり、頭にはトサカがある。

「おう、おはようさん。俺は ブン!! ドワア!!!」

「カアアアアアアア!!!」

言い終わるのを待たずにそのトランスフォーマーはゲルシャークに襲いかかった。手には何処からか取り出したマグマのような色をした炎を噴き出す鉄球のついた鎖が握られている。

「カアアアアアア!!!」

「ちよっ?!?おまっ?!?!?!?!?!」

聞く耳持たず、トランスフォーマーは鉄球をゲルシャークへと降り下ろす。

「だから話を聞けっの!!! テールバンカー!!!」

ゲルシャークは仕方なく左手のアームで応戦する。

「クアアアアアア!!!」

トランスフォーマーは鉄球をぐるぐると振り回し、すると炎の渦が発生し、ゲルシャークへと放たれる。

「やられてたまるか!メーザーストーム!!!」

ゲルシャークの胸の水晶から青白い光線が放たれ、相手の炎を押し返す。

「カア!!?クアアアアアア!!!」

これを反されるとは思って、もみなかったのか、トランスフォーマーはとっさに反応できず、光線に当たり吹き飛ばされる。

「やつやべえ、力を入れすぎたか?おい、大丈夫か?」

ゲルシャークは申し訳なさそうに駆け寄るが

「クツクアアアアアア!!!トランスフォーム!!!」

トランスフォーマーは追撃されると思ったのか、トランスフォームする。一見鳥のように見えるが頭にはトサカがあり、翼は皮膜のように見える。

「プテラノドン?ダイノボットか!?!」

「クアアアアアア!!!」

こいつには勝てないと覚ったのか、トランスフォーマーは空へ飛び去る。

「待てっての!!!ビーストモード!!!」

ゲルシャークはビーストモードのサイボーグザメとなり、トランスフォーマーを追いかける。

「カアアアアア!!!?」

まさか空まで追いかけてくるとは思わなかったらしく、トランスフォーマーは酷く慌てる。

「話を聞けってば」

そういうとゲルシャークはトランスフォーマーの前に回り込む。

「カアアアアアア!!!?」

「うるせえ」ベシッ

ゲルシャークは尾びれでトランスフォーマーの頭をひっぱたく。

「落ち着けっての。とりあえず言葉は通じるか?話せるのか?」

「クアアア…話せるぞ…」

「そうか、良かった。俺はゲルシャークだ。お前の名前は?」

「……スワープ、ダイノボットだ」

「そうか、よろしくな。んで?お前は どうして捕まったんだ?」

「他のダイノボットとケンカしてそれで……」

(なるほど、どうやら罪状は軽い器物破損といったところだな。さっきのは気が動転してのことだろうし、こいつは大丈夫そうだな。)

「なあスワープ、話が有るんだが、とりあえず地面に降りないか？」

「?わかった」

そうして二人は地面に降り立つ。

「トランスフォーム!!!」

「それで話なんだか…」

ロボットモードになりスワープに話かけようとするゲルシャークだが、

「そのディセプティコン!!!おとなしく手を上げて投降しなさい!!!」

その言葉を白いマツシブな女性トランスフォーマーが遮った

## 誤解

「もう一度いうわよ！大人しく手を上げて投降しなさい！デイセプティコン!!」

俺たちは今非常に困った状況下にある。なんとかスワープを落ち着かせて話し合いに持ち込もうとしたのだが、この白いトランスフォーマー、ストロングアームに銃を突き付けられている。

「トランスフォーマー!!! ストロングアーム勝手に行くなど言ってるだろう!!!」

「トランスフォーマー!!! おお、何だかいかにも悪そうなやつがいるな」

そう言っただけ登場したのは、黄色いスポーツカーから変形したバンブルビーと「瞬速」とペイントされた赤いランボルギーニから変形したサイドスワイプだ。：てか悪人面で悪かったな。

「クアア敵か」

スワープはそう言っただけ武器を展開する

「待て待て落ち着けスワープ。お前らも武器を下ろしてくれ。俺たちは戦うつもりはない。そもそも俺はデイセプティコンじゃない。」

「なんだって?」

「隊長、この前のスチールジョーのように嘘をついてるのかもしれない。」

「そもそもフィクシットがディセプティコン信号が2つ出てるって言ってたしな。」

嘘だろう！一つはスワープとしてもう一つってまさか俺!?!でも俺のエンブレムはデストロンガーのものハズだぞ?」

「待て待て本当なんだって!見ろよこのマーク、ディセプティコンのじゃないだろう!?!」

そう言って俺はエンブレムを見せる

「…本当だ。ディセプティコンのじゃない。」

「だけどフィクシットは信号は2つだって言ってたぜ?」

「確認してみる。フィクシット、ディセプティコンの信号は本当に2つなのか?」

『はい、確かにそこから2つ出てます。』

「そうか……」

「じゃあディセプティコンの囚人名簿から、プテラノドンに変形するやつと空飛ぶサメに変形するやつがいるか調べてくれる?」

『はいな!情報から検索………出ました!プテラノドンに変形する方はスワープゆうて、捕まった理由は他のダイノボットとの抗争による器物破損のようです!』

あつやっぱりそうなのか。ダイノボットはどこの世界も戦い好きなんだな

『あとはサメに変形する方向ですが……データベースにはそんなディセプティコンは囚人にはおりませんね?』

「……てことは本当にディセプティコンじゃないのか?」

「でもそれじゃあ信号が2つ出てるのは何故だ?」

「センサーが壊れてるんじゃないか?」

『いえいえそんなはずは……確かに隊長らがおるところから信号は出てるんですけど……』

「どういうことだ?すると向こうからズンズンと足音が聞こえてきた。」

「へえ、へえ、トランスフォーム!!!あくやつと追い付いたぜえ」

現れたのは緑色のテイラノサウルスから変形したガタイのいいダイノボット、グリムロックだった。

「クアアグリムロック久しい」

「おお!?スワープじゃねえか!!久しぶりだなあ!!」

「あれ?お前ら知り合いなわけ?」

サイドスワイプが尋ねる。

「ああ、俺たちダイノボット、よくいつしよにケンカした。」

「懐かしいなあ。また今度ケンカしようぜ!とところでその隣の悪そうなやつは誰だ



「？」

また悪そうって……どうせ俺は悪人面だよチクショー!!!

「こいつゲルシャーク、俺をボットから出してくれた。こいつ強い、俺勝てなかった。」

「へえ、そんなに強いのか？」

「ああ、強い。お前でも多分勝てない。」

ちよっ!? やめてよ、誉めてもなんもでないから!!!

『へえ〜〜そいつは使えそうだなあ』

すると突然声が聞こえた

「!!?!何処にいる!?!出てこい!!!」

『カハハハハさあ〜てどこでしょう?』

声はすれども姿は見えない。何処にいるんだ?

待てよ、そう言えばさつきフィクシットはなんて言った? たしかバンブルビーたちがいるところから反応が2つすると……待てよ、ひよつとしたら……そうか!

「(ここ)かあ!! ビーストモード!!!」

俺はビーストモードになり、地面に潜る。

「そこだ!! ジョーズテイス!!!」

俺は気配のした方におもいつきり噛みついた。

「グギャアアアア!!!」

手応えありだ。俺はそれを口に加えたまま地面から飛び出した。それは黒と紫色をしたカブトムシのロボットだった。俺はそいつを地面に叩きつける。

「グオオてめえよくもやりやがったな!!! トランスフォーム!!!」

そいつはすかさずロボットモードに変形する。

「フィクシット、カブトムシに変形するデイセプティコンはいるか!？」

バンブルビーがフィクシットに尋ねる。

『はい、検索します…出ました! ポンプシエル、インセクティコンです!!!』

## 乱闘

「グオオオオ……てめえゆるさねえ！ポツコボコのスクラップにしてやる!!!」

ボンブシエルはそう言つて俺を睨み付けるが、胸から腰にかけてついた俺の歯形が痛々しい。わりと本気で噛んだからなあ。

「ポツコボコにするのはかまわないが、この人数を相手にその傷ではいささか部が悪くないじゃないか？」

俺はそう言つて左手のアームをボンブシエルに向ける。見ると他の面々も（グリムロツクを除いて）武器を展開して構えている。

「カハハハ、心配には及ばねえよ。この通りなあ！」

そう言うどボンブシエルは近くに生えていた木を根っこから引き抜きバリバリとむさぼり食う。すると体にあつた傷がみるみるふさがつて行く。

「カハハハハはどうだ！これぞ俺たちインセクティコンの超生命力！有機物やエネルギーを食らうことで例え体がバラバラになつていても再生できるのさ!!!」

「だが、未だに不利なことには変わらないだろう？」

「確かに俺一人ではいささかキツイなあ。…俺一人ならな？」

「なに？ どういうことだ？」

「こういうことだよ!! くらえセレブドシエル!!」

するとボンブシエルは指先からネジのようなものをグリムロックの眉間に打ち込む

「カハハハハ!!! さあやれ!! オートボットをぶっ飛ばせ!!!」

「グオオオオオ!!!」

するとグリムロックはバンブルビーたちに襲い掛かる

「うわっ!!! 止めろって!!!」

「どうしたんだグリムロック!!!」

「カハハハハ! これが俺の能力セレブドシエル!! 相手の眉間にこの情報端末を打ち込んでコントロールできるのさ!!!」

「ウオオオオオ!!!」

「くそっ!! グリムロック、しっかりしろ!!」

「お前たちはグリムロックを抑えていてくれ! スワープ、やるぞ!!!」

「クアア了解、バーニングボール!!!」

「テールショット!!!」

スワープはボンブシエルに燃える鉄球を投げつけ、俺は左手のアームからエネルギー

弾を放つ

それはボンブシエルに命中し、ボンブシエルは盛大に吹き飛ぶ

「グアアアアア!!?ちつ、ちくしやう…ここは一旦引き上げるぜ。トランスフォーム!!!  
あゝばよ!」

そう言うボンブシエルはカブトムシに変形し、羽を広げ逃げていく。

「逃がすと思うか ドカン どわあああ!!!?」

俺はボンブシエルを追いかけようとしたが、グリムロックに吹き飛ばされたサイドスワイプに押し潰されてしまう。

「いつてえ、ああわりい!」

「早く退いてくれ重い!!!」

S a i d デイセプティコン

「畜生…あいつらよくもやりやがったな…とりあえずどこかで傷を治さねえと…どこかにいい場所はっつと」

そうやってしばらく飛んでいると、ボンブシエルの目の前に水力発電所のダムが見え

る

「カハハハハ！こいつはついてるぜえ!!!」

S a i d オートボット

「スワープ、グリムロックを鎖で縛ってくれ！」

「クアア了解」

スワープは鎖をグリムロックの足に巻き付け転倒させる。その隙に俺は左手のアームでグリムロックの眉間の端末を引っっこ抜く

「ウオオオオ!!!……ありや？俺はなにを……」

「ありがとう、助かったよ。ええつと……」

「ゲルシャークだ。よろしくなバンブルビー。色々と聞きたいことはあるだろうが、まずはあいつを捕まえることを考えないか？」

「ああ、そうだな！フィクシット、やつが何処に向かったかわかるか？」

『はい、ポンプシエルはどうやら水力発電所に向かったようです。』

「よし、みんな行くぞ!!」

「「トランスフォーム!!!」」

「俺たちも行くぞ!!ピーストモード!!!」

「わかった、トランスフォーム!!!」

俺たちは水力発電所に向かった。そして水力発電所の手間まできた時、

「カアツ!!!」

「うお?!」

ボンブシエルがいきなり俺に飛び乗ってきた。俺はなんとか振りほどく。

「このお、テールアンカー!!!」

俺はアームでボンブシエルを突き刺す。するとボンブシエルは火花を散らして爆発した…

「呆気なつ!!!…て言うか俺殺っちゃった?!?!?!」

『カハハハハ!心配には及ばねえぜえ。』

声のした方を見ると、ボンブシエルが空からこちらを見ていた。だが、一人だけではない。周りには何十人もボンブシエルがいる。よく見ると、若干色が薄い気がする。

「カハハハハ!これも俺たちインセクティコンの能力だ。高純度のエネルギーを撮取することで自分のクローンを作り出せるのさ!!!さあ、やっちゃまえお前たち!!!」

「!!!カアアアアアアアアア!!!」

本体のボンブシエルが指令を出すと、クローンボンブシエルたちが一斉に襲い掛かってきた



## 仲間入り

「オラアアアアア!!!」

グリムロックはその剛腕でボンブシエルたちをなぎ倒し

「ハアアアアア!!!」

サイドスワイプはその俊敏な動きで次々とボンブシエルたちを斬り倒していく。

「クアアアアア!!!」

スワープはビーストモードになり、空中から火炎放射を放ち、ボンブシエルたちを焼き払い

「ハア!!やあ!!」

ストロングアームはブラスタガンで次々ボンブシエルたちを打ち落とす

「ストロングアーム!グリムロックをカバーしろ!!サイドスワイプは取りこぼしに気を付けろ!!スワープ、味方に炎が来ないようにしてくれ!!」

バンブルビーはその豊富な戦闘経験から全員に指示を出しながらボンブシエルたちを蹴散らして行った。そして俺はと言うと…

「くそ、何度も何度も邪魔しやがって！」

「あいにく、あんまり好き放題やらせる訳にはいかないからな!!」  
本体であるボンブシエルの相手をしていた。

「くそっ!!倒しても倒しても切りがないぜ!!」

「いくら何でもこの増殖スピードは異常だぞ!!」

見ると、みんな疲れが出ている。不味いな、早く本体を倒さないと…するとフィクシットから通信が入る

『みなはん!どうやら発電所の発電装置にボンブシエルのクローンの何体かが張り付いてクローンを精製し続けてるようです!!』

なるほど、通りで…ならば

「バンブルビー、ここは俺とスワープに任せてお前たちは発電所のクローンを潰せ!!」

「!!?!!」

「早くしろ!!時間が惜しい!!」

「わかった!みんな行くぞ!」

バンブルビーたちは発電所に向かう

「行かせるか!!クローンどもやれ!!」

ボンブシエルはクローンたちをバンブルビーたちにけしかけるが

「スワープ!!!」

「クアアアアアア!!!」

スワープの火炎放射によって情け容赦なく焼き付くされる。

「くそ、あのダイノボットは厄介だ」

そう言うのとボンブシエルはスワープに飛んで行く

「くらえセレブドシエル!!!」

「クアアアアア!!!?」

ボンブシエルによって額に端末を打ち込まれ、スワープはコントロールされてしま  
う。

「カハハハ、形勢逆転だなあ?」

俺はボンブシエルとそのクローン軍団、さらにコントロールされたスワープによって  
囲まれてしまう。…かなり不味いな

「カハハハ、心配するな、殺しはしねえ、お前もコントロールして他のオートボットど  
もをやっつけた後そいつらもコントロールして、やがてはこの星を俺だけのものにして  
やる。」

「それは大きく出たものだ、だがそう簡単に行くかな?」

「ハッ、負け惜しみを!!!」

「どうかな?! ビーストモード!!! くらえ シャークトローピード!!!」

俺はビーストモードとなり、口から魚雷を発射する。

「あらよつと、ばかめそんなもん食らうか!!!」

ボンブシエルはかわして得意げに言うが

「さあそれはどうかな?」

「なに? うおおおおお!!!」

そう、俺のシャークトローピードは追尾製なのだ! ボンブシエルは追いかける魚雷から必死に逃げまわり、クローンたちとスワープは沈黙する。

「今だ!!! テールショットストーム!!!」

俺はアームからエネルギー弾を雨のように撃ちまくる。エネルギー弾に撃ち抜かれ、クローンたちは次々と爆破していく。

「ついでに…よつと、」

俺はスワープの額の端末を外し彼を解放する

「すまないゲルシャーク、油断した」

「別に気にしてないよ」

「ゲルシャーク、スワープ、発電所のクローンは倒したぞ!!!」

そこへバンブルビーたちが帰ってくる、これで残りは本体だけだ

「うおおお!!?来るなあああ!!」

その本体は未だに魚雷とおいかけてっこしていた。

「ならすぐに終わらせてやる!!!メーザーストーム!!!」

「グギャアアアアアア!!!」

俺は胸の水晶から光線を放ち、ボンブシエルは盛大に吹き飛ばす。そしてストロングアームがボンブシエルに駆け寄り手錠をかける。

「よし、捕獲完了だな。二人ともありがとう。本当に助かった。」

「いや、当然のことをしたまでさ。」

「そういうことだ」

「隊長、スワープのことはどうしましょう?」

ストロングアームがボンブシエルを担いで戻ってくる

「その事なんだかバンブルビー、俺たちをこのまま君たちのチームに入れてくれないか?」

「なに?」

「なに、これから先多くの戦いを経験するだろう、戦力は多いに越したことはないだろう?」

「……………わかった!君たちのチーム入りを認めよう。」

「ありがとう。なら改めて、俺の名はゲルシャーク、デストロンガーの牙提督だ。これからよろしくな。」

「デストロンガー？」

「詳しいことは後で話す。まずはボンブシエルを運ばないか？」

「あつああ、そうだな」

こうして俺は協力者、スワープは仮釈放という形でチームバンブルビーの一員となった。

## 影

ここは地球のとある洞窟、その中に数体の巨大な影があった。

「……ああ、こっちは順調に進んでいる。そちらはそちらで自由にやってくれてかまわない。なあに、裏方は慣れたものさ。」

『すまないなあ、いつもお前には助かっている。』

「クフフ、硬いことを言うな、同じスパークを分けた兄弟だろう?」

『ああ、そうだな。頼んだぞ兄弟』

「任せろ兄貴。」

そう言つてその影は通信を切る。

「定期通信は終わったようですね?」

するとそこに2つの影が現れる。一つはやや小柄（トランスフォーマーにしてはだが）なダークレッドのボディのトランスフォーマー。もう一つは、背中の羽や足の爪などどことなく鳥を思わせる風貌をした青いトランスフォーマーだ。

「クフフ、どうだった先生、久しぶりの地球は?」

「ええ、相変わらず楽しいところですよ。映画、アート、そしてカーレース、ふふふ、

久しぶりに熱くなつてしまいましたよ。」

「それは何より、やがてこの星そのものが我々ディセプティコンのものとなるのだから。」

「ふふふ、それは素晴らしい。私も協力させていただきますよ。」

「しかし、本当にこれで良かったのか？ 捕虜という立場とはいえなかなかの待遇だったのだろうか？」

「捕虜というのも退屈なものでね、私は面倒なのも嫌いですが退屈なのも嫌いなのですよ。…それに彼には少なからずの因縁がありますね……」

「グウウ…オートボット、はかい！ 破壊！！ハカイ！！」

「落ち着きなさいドレッドウィング、そういうわけで、私たちも微力ではありますが協力させていただきますよ。フアントムジョー？」

「ああ、よろしく頼むよ。かつてのディセプティコンの破壊大帝メガトロン直属部隊の闇医者メディックノックアウト殿？」

「それはもはや昔の名、より美しくそして力強くなった今の私の名はブラッディノックアウトです。」

「しかし、あんたもとんでもねえ人だなあ？ 同じ捕虜のディセプティコンのボディを解体して自分のスペアパーツにしちまうんだから。」



「美しき私の糧となり、  
彼らも本望でしょう?」

「イカれてるぜ」

「誉め言葉と解釈します。」

するとそこに一台の黒い改造車が走って来た。

「トランスフォーム!!!」つと、遅くなって悪いねボス」

その車は右手がフックになっていて細身のトランスフォーマーに姿を変える。

「おや?あなたは?」

「俺かい? ロックダウンだヨロシク!!! そう言うあんたはメガトロンのところにいたメ  
ディックノックアウトじゃないのかい?」

「今の私はブラッディノックアウトです。あなたも彼によってここにやって来たので  
すか?」

「まあな。 つつても、俺はディセプティコンじゃないがな。 しがない宇宙の賞金稼ぎ  
さ。 まあディセプティコンの方が金払いがいいからどつちかというところら側だがな  
?」

「ところでロックダウン、お前につけたインセクティコンの二人はどうした?」

「あん? あいつらならここを出てすぐにどっか行っちゃったぜ?」

「…チツあいつら…何のために自由にしてやったと思つてやがる」

『ボス！ボス!!』

するとそこに通信が入る。さっき言ったインセクティコンの片割れ、クワガタに変形するシャープネルだ。

「おいシャープネル、お前勝手にいなくなつてどういふつもりだ？ボンブシエルはどうした？」

『それ何だかよボス！ボンブシエルのやつがオートボットに捕まつちまつた!!』

「何？どういふことだ？」

『それがよう、俺は遠くから見てたんだがよ、あいつどうやらオートボットにちよつかいかけたみたいだよ、オートボットどもをクローンどもで圧倒してたんだが、結局クローンを全部潰されて捕まつちまつたんだ。』

「チツあのバカ油断しやがつて…それで、メンバーは何人でどいつがいた？」

『ボスが前言つてた黄色と赤と白の車に変形する奴らとティラノサウルスに変形するダイノボット、それにプレアロドンに変形するダイノボットにサメに変形するやつがいた。』

「黄色いオートボットは間違いなく彼ですね？」

「グウウウウ」

オートボットオオオオオ!!!」

「……それで? その二人の名前は?」

『へえ、プテラノドンがスワープ、サメに変形する方がゲルシャークとか。』

「ツ!!!? ……そうか…」

『ボス?』

「……いや、何でもない。とりあえずこちらに戻ってこい、話はそれからだ。」

『へ、へえ』

「ゲルシャーク…聞かない名前ですね」

「俺も長いこと賞金首を追って宇宙をまわっているが、そんな奴は知らねえなあ。」

「まあいいさ、とりあえず今はシャープネルの帰りを待とう。」

そう言つてフアントムジョーは奥に歩いて行く

(楽しみだぜ、なあもう一人のイレギュラー?)

その顔は狂喜に染まっていた

## ならず者

「デニー、これはどこに置いたらいいんだ？」

「ああ、それは三番通路に同じやつがあるからその隣に置いてくれ。」

「了解」

どうも、ゲルシャークです。俺は今バンブルビーたちが拠点としているデニーのスクラップ置き場に住まわせてもらっている。ただおいてもらうのも申し訳ないので、こうしてデニーの手伝いをしているのだ。

「しかしゲルシャークは律儀だね。おかげで僕も助かるよ。」

「いや、俺みたいなのよそ者をおいてもらっているんだからせめて何かしないと気が済まないんだ。」

「ねえ、ゲルシャークって本当に異世界からきたの!？」

「ラッセルが俺に尋ねる。心なしか目が輝いている気がする。」

「まあ、そう言うことになるな。自分でも信じられないけど。」

俺のことはみんなには異世界から来たと話している。別に間違っではないし、元は人間でしたなんてそれこそ信じられないだろう。

「ツ!?誰か来た。みんな隠れて!!!」

ラツセルがそう言うのとみんなはビークルモードになり、車置き場に走る。俺とスワーブ、グリムロックはビーストモードになり装飾のフリをする。

すると、なにやら頭に鹿の角のようなものを着けた人たちが来た。そのリーダーと思われるアーノルドという人がなにやら森の精霊シカピヨンとやらが材料を集めてくるよう命令されたらしいが、バンブルビー曰くそれはスペースブリッジの材料だという。そしてフィクシットに鹿に似た姿のデイセプティコンを調べてもらったところ、そいつは「サンダーフーフ」というサイバトロンの星の指折りのマフィアのボスらしい。そして材料の中の巨大発電機が手に入らなかつたらしく、アーノルドは残念そうに帰って行った。

「この近くで発電機の手に入りそうな場所はこの先にある発電所だな。」

デニーの情報から、俺たちは二人一組で発電所の警備にあたることになった。俺とスワーブはビーストモードで空から見張っていた。すると、しばらくしてバンブルビーから通信が入った。なんでもグリムロックと警備に当たっていたサイドスワイプが勝手に警備から外れてしまったらしく、その隙をつかれてグリムロックがやられてしまい、発電機も奪われたようだ。

バンブルビーは彼を咎めたが、名誉挽回のチャンスを与えることにしたようだ。心配

なので俺もついて行くことにした。

バンブルビーとサイドスワイプはスペースブリッジを作らせている現場に向かい、彼らを追い払った。……しかしバンブルピオンにサイドスワイプで……するとそこに木々を押し倒しながら1台のトラクターがやって来た。

「トランスフォーム!!! どういうことなんでいええ! 作業をしてたちっこい奴らはどうしたんでい!!!」

どうやらこいつがサンダーフーフらしい。

「サンダーフーフお前を逮捕する!!!」

「法律がどうのとか下らねえ説教垂れんなよお巡りさんよ。俺様はサンダーフーフ様だぜえ? かつてはサイバトロン星で1番のシマを仕切ったマフィアのボスだったんでい!!! お前らに仕事があるのは俺のおかげでい!!!」

どうやら反省する気はないらしい。サンダーフーフは見逃すならスペースブリッジを使わせてやると持ちかけたがバンブルビーはそれを断り戦闘となる。サンダーフーフは見かけに寄らずパワーファイターで二人を圧倒する。そろそろ出るとしよう。

「交代だバンブルビー!」

「ツ!? ゲルシャーク、来てたのか。」

「二人が心配だね。こっそりつけて来た。」

「ああん？なんでいてめえはあ!!!」

「ただの協力者だよ！テールアンカー!!!」

俺は左手のアームで殴りかかるが、サンダーフーフの角に受け止められ、そのまま押し合いになる。

「ほう、てめえはなかなか骨がありそうじゃねえか、ええおい!!!」

「そりやどうも！ビーストモード！ジョーズティース!!!」

俺はビーストモードになり、サンダーフーフの角に噛みつく。

「うおおおおお!!!? 負けてたまるかああ!!!」

サンダーフーフも負けじと踏ん張り、お互いに一步も引けない接戦となる。するとそこ……

「うおおおおおらあ!!!」

「ぐあああああ!!!?!」

フレイルに変化したデイセプティコンハンターを持ったサイドスワイプがサンダーフーフを吹っ飛ばした。

「余計なお世話だったか？」

「いや、最高のタイミングだ。ありがとう。」

「いてて、畜生よくも……」

サンダーフーフはスペースブリッジの操作パネルに手をかけ立ち上がる。すると、スペースブリッジの入り口に渦が発生する。どうやら誤って起動させてしまったらしい。しかしどうも様子がおかしい。

「なっ何だこりゃあ!!!?」

「不味い、あれはブラックホールだ!!!」

ブツブラックホール?!?!?! どうやらスペースブリッジの配線が間違っていたらしく、ブラックホールが発生したらしい。俺たちは急いで逃げる。

「ぬおおおお!!! 吸い込まれてたまるかああ!!!」

サンダーフーフは蹄を地面に食い込ませ踏ん張るが、いかんせん近くにいたせいでだんだん吸い込まれて行く。

「畜生!!! こうなったらためえだけでも道ずれにしてやらあ!!!」

そう言つてやつは俺につかみかかる。俺はある決心をする。

「そうかい!!! ならお望み通りに!!!」

俺は手を離しサンダーフーフに蹴りを食らわす。サンダーフーフはたじろぎ、そのまま渦に吸い込まれて行く。

「てやんでえチクシヨー!!! 覚えてやがれええええ!!!」

サンダーフーフはそう言い残し、渦に消えて行く。俺はすぐさまビーストモードにな



りパネルまで全力で飛びロボットモードになりスイッチを切る。そしてブラックホールは消滅する。

「ありがとうゲルシャーク、だけど最後のは少しだけ足りないな」

「済まない、とっさの判断だったんだ。」

するとサイドスワイプが前に出て、謝罪した。

「済まないみんな、俺の勝手な行動で…」

「いいんだ、サイドスワイプ。間違いに気付くことができれば、もう二度と同じ間違いは犯すなよ。」

「はい！隊長!!!」

どうやら丸く収まったようだ。よかったよかった。その後、体中に枝を巻き付けたアーノルドたちを見かけたが……ほっとくことにした。

# カラス

「カアアアアアアアア!!!」

「逃がすかああああ!!!」

どうも、毎度お馴染みゲルシャークです。俺は現在カラスに似た姿のデイセプティコンを追っている。

「バンブルビー!こちらゲルシャーク、デイセプティコンを発見!現在絶賛追跡中だ!!!」

『了解、すぐそちらに向かう!』

「なるべく早く頼む。おい!いい加減捕まれ!!」

「イヤアア!!!あんたしつこい!しつこい男は嫌われるわアアア!!!」

「大きなお世話だバカヤローアアア!!!」

どうせ今まで彼女なんかいたことありませんよ。泣いてないぞチクショウめ!!!

「お待たせゲルシャーク:って何で泣いてるの?」

「サイドスワイプ、今は放っておいてくれ。」

「あ、うん、ごめん。」

「キラキラー!!!」

「どわあ!!!?」

ディセプティコンはいきなり金切り声をあげてサイドスワイプに飛びかかった。

「いつてえ!!!背中がガリガリになるだろうが!!!」

「うるっさい!!!つてアタツ!?イタイ!!!」

「大人しく翼を上げなさい!!!」

ストロングアームがショットガンを構えていい放つ。…何で体をかいてるんだ?

「お断りよー!!!」

するとディセプティコンは見かけによらず俊敏な動きでストロングアームをも抑え

つける。

「俺を忘れてくれるなよ!」

俺はテールアンカーをやつの顔に突きつける。

「どうする?両足は塞がってるぜ?」

「んもー本当しつこい!!あんた彼女いないでしょー!!!」

「うっせー!!!生まれてこのかた出来たことないわバツキャローー!!!」

俺はテールショットを打ちまくる。

「ちよつと!? 私たちにも当たるじゃない!!」

「落ち着けて!!」

「つせー!!! チクシヨウどいつも俺を差し置いて……顔か!? やつば顔なのかコンチクシヨー!!!」

思い出すのはあの夏の終わり、俺の友達はみんな彼女作って独り身は俺だけ……みんな卒業してないのに色々卒業しやがって、俺だけ留年かチクシヨー!!!

「トランスフォーム!!! デイセプティコン大人しく手を上げて……つて何やつてるんだゲルシャーク?!」

「隊長ゲルシャークを止めてくれ!!!」

「落ち着けてゲルシャーク!!」

そう言つてグリムロックは俺を羽交い締めにする。

「離せ! 離せグリムロック!!!」

「落ち着けゲルシャーク!!! 一体何があつたんだ?」

「隙ありー!!!」

「「「「うわあああ!!!」」」」

するとやつはサイドスワイプとストロングアームを俺たちに投げつけ、俺たちはもみくちやになった。

「カーン!!! バイバイ♪」

そう言つてやつは飛び立つ。するとそこに赤い影が体当たりする。

「ニャアアアアアアア!!!」

突然の衝撃にディセプティコンは地面に落ちる。

「クアア遅くなつてすまない。」

赤い翼をはためかせ、スワープは言う。

「イタイ……もうっ!! 一体だレツ!? ……………」

地面に墜落したディセプティコンはそう言いかけてフリーズする。…………心なしか頬が赤いのは気のせいだろうか……

「トランスフォーム!!! 大人しくしてもらおうか。」

スワープはロボットモードになり武器のサーマルメイスを展開する。

「……………か」

「か?」

「カッコいいー!!!」

するとやつはロボットモードになる。てかあいつ女!!!?

「好き!!! 結婚して!!!」

「へ?」

「『『『ええ!!!!??』』』』」

いきなりそんなことを言うディセプティコンの女。流石のスワープも戸惑っている。

「あ、ええ、その、あの……とりあえずお付き合いから始める……てことで……」

「うん♪」

「『『『ええええええええええ!!!!??』』』』」

「俺スワープ。とりあえず盗んだものはちゃんと返すこと。」

「アタシフィルチ!!わかった!ちゃんと返すねダーリン♪」

こうして、ディセプティコンのフィルチはあっさり確保?され、盗んだものも無事デニーが持ち主に返した(一部持ち主の見つからないものは貰うことになりかなり喜んでいた)。

「………てな訳で今日から仮釈放という形でチームに協力して貰う……」

「フィルチです!!ダーリンとは結婚を前提にお付き合いです!」

「クアア／／／／／」

「………それと隊長、いい加減あれなんとかしてくれよ。」

「元気出しながらゲルシャーク!!」

「きつと君にもいつか好きな人が見つかるさ。だから僕の宝の山から早く出てきてくれ!!!」

「うるせー!!! ほっといてくれ!!!」

この後、俺は半日ほど骨董品の山に引きこもった。

## 裏切り？

鳥と翼竜のカップル爆誕事件とゲルシャークの引きこもり事件からしばらくたったある日、スワープと新たに仲間に加わったフィルチはポットの反応を追い基地からしばらく離れた森に調査に向かっていた。

「フィルチ、何か見えるか？」

「待つててダーリン、あっ！キラキラ発見！」

そう言つてフィルチは降下して行きスワープもそれに続く。そこには無理矢理こじ開けられたポットがあつた。

「少し遅かつたか……こちらスワープ、ポットを発見したがすでに囚人は脱走したあつた。」

『了解、まだ周囲にいるかもしれない。警戒を怠るな。』

「了解、……さて、どうするか……」

すると向こうから大きな足音が近づいてくる。

「ダーリン……」



「わかっている。」

二人は戦闘体勢に入る。木々をなぎ倒し、現れたのは緑の恐竜、自分たちのよく知るグリムロックだった。

「なんだ、脅かさないでくれグリムロック。」

スワープはそう言って彼に近づくが……

「グオオオオオオオ!!」

「なっ!?!うわあ!?!」

グリムロックは突然唸り声を上げ、その巨大な尾でスワープを尻ぎ払った。

「ダーリン!?!あなた何を」

「グガアアアア!!」

「きやあ!?!」

グリムロックの突然の暴挙に怒るフィルチだが、グリムロックの突進を喰らい吹き飛ばされ意識を失う。

「フィルチ!?!グリムロックお前……」

スワープはグリムロックを睨むが体が言うことを聞かない。グリムロックはずんずんと彼に近づき……

「グオアア!!」

「ガハッ!？」

そこでスワープです意識は途絶えた。



皆さんお久しぶり、ゲルシャークだ。現在俺はビーストモードで空から周囲の巡回をしている。

『ゲルシャーク、こちらバンブルビーだ。先ほどポットの調査に向かったスワープとフィルチの通信が途絶えた。至急そちらに向かつてくれ!』

「了解！さて、では行こうか。」

俺は早速二人の通信が途絶えた座標に向かおうとするが、どこからともなく俺にミサイルが向かって来た。

「うおっ!?!なんだ!？」

俺はなんとかミサイルをかわすが、追尾性だつたらしくミサイルは方向転換して俺に向かつてくる。

「やられてたまるか! シャークトローピード!!」

俺は口から魚雷を放ちミサイルを相殺する。すると向こうから藍色の戦闘機が飛ん

で来てミサイルを放つ。俺はそれを魚雷で相殺しながらかわす。すると戦闘機は俺に向かつて突進してきた。なんて無茶な！自爆特攻!? つてか俺軍の恨み買うようなことしたっけ!?

「トランスフォーム!!!」

「何?! うわあ!?!」

すると俺にギリギリまで接近した戦闘機はロボットに変形して俺にのし掛かる。俺はキリモミしながら地面に落下して行く。こいつデイセプティコンだったのか!?

「落ちてたまるか! トランスフォーム!!!」

「グガッ!?!」

俺はトランスフォームしてやつを振りほどく。

「二人で落ちな!」

「グガア!?!」

俺はやつを蹴りつけ地面に叩きつけなんとか着地する。

「こちらゲルシャーク、急行中デイセプティコンに襲われた。増援を要請する!」

『こつこちらバンブルビー、ゲルシャークすまない! 先ほどグリムロックが急に暴れ出してみんなをうわあつ!?! すまない! そちらでなんとかしてくれ!』ブツツ

「はっ? グリムロックが!?! えっおいバンブルビー!?!」

くそっ、どういうことだ次から次へと

「なんだお前は!?何が目的で俺に襲いかかった!?」

「グガア!オートボット、破壊!破壊!破壊!」

あつ、駄目だこいつ、理性が飛んでらっしやる。するとやつは背中に背負ったカノン砲を展開して俺に向けて乱射してきた。

「破壊!」

「うわっ!?ちよっ!?シヤレにならないっての!」

俺はなんとかかわしながらテールショットを打つがカンカンと弾かれやつのボディに傷一つつかない。嘘だろ!?どんだけ頑丈なんだあいつ!!?メーザーストームならなんとかなるかもしれないけどチャージする暇もない。

「ガアッ!」

するとやつは腰から何かをこちらに向けて投げた。なんかピッピッっていつて赤く点滅してる……つてまさかこれ手榴だ《ドカアアアン!!!》

「グハハハハハハ!!!破壊!破壊!!破壊!!!」

「メーザーストーム!!!」

「グオオオオオオオオオ!!!?」

爆煙を吹き飛ばし、メーザーストームがやつに直撃しやつを吹き飛ばす。はあ、なん

とか後ろに飛び退いてやり過ぎせた。

「グオ……ガア………」

「すごいな、まだ意識があるのか……しかしこいつ何ものっ!？」

急に俺の背中から電流が走った。俺は体に力が入らずその場に倒れ伏す。

「こっ……こいつは囷だったのか………」

「フフフ、ご明察、あなたを連れてくるようにあるお方から申し使ったものでね？」

「だっ……誰……だ……そいつは………」

「それはすぐにわかることです。では、アデュー。」

俺に二度目の電流が走る。完全に意識が消え行く中、俺の目に写ったのはダークレットのボディをしたトランスフォーマーだった。

## 対面

「うぐっ……こは……」

目が覚めると、俺は洞窟の中で鎖で縛られていた。

「お目覚めかな、ゲルシャーク？」

声のした方を見ると、白と紫のカラーリングをした狼男のような姿をしたトランスフオーマーがいた。

「お前は誰だ、なんのために俺を連れてきた!？」

「そう興奮するな、俺の名前はフアントムジョー。一応こいつらのボスをやっている。」

すると洞窟の奥から四体のトランスフオーマーがやってきた。俺を攻撃した青いやつ、恐らく俺を気絶させた赤いやつ、左手がフックになっている細身のトランスフオーマー、やや小さい紫のやつだ。

「先ほどぶりですね、私闘医者のブラッディノックアウトと申します。こちらはドレッドウイングです。」

「グウウ……」

「ロツクダウンだヨロシク！しがたない宇宙の賞金稼ぎさ。」

「クハハハ、シャープネル様だぜ。相方のボンブシエルが世話になったな。」

それはどれもこれまでのトランスフォーマーの作品で聞いたことのある名前だ。ノックアウトとドレッドウィングはこの世界における前作のプライムのデイセプティコンだったはず。

「……………俺を捕まえて何をするつもりだ？」

俺はファントムジョーに尋ねる。

「フフフ、まあ簡単に言えば人質だよ、俺たちとは別に俺の兄貴が同じデイセプティコンの仲間を引き連れて動いている。俺たちの目的はこの星を侵略して俺たちデイセプティコンの新たな故郷にすることだ。それには奴らオートボットが邪魔でね、だがいかにせん戦力が心もとない。それでお前の身柄を交換条件に収容されてるデイセプティコンを解放しようって魂胆さ。」

やつはつらつらと語る。もしこいつらに仲間のデイセプティコンが加わったらバンブルビーたちは数の差で圧倒されてしまうだろう。

「くっ、そんなことはさせない！」

「フフフ、まあ待て、話はまだ終わっていない……………お前、俺たちの仲間にならないか？」

突然やつはそんなことを言い出した。

「!?…………何を言っているんだ?」

「聞いた話ではお前は正確にはオートボットの仲間ではないんだろう?身の置き場がないから仕方なく協力しているんじゃないのか?ならばいつそ俺たちといた方がいいんじゃないか?」

やつはそんなことを言い俺の目の前まで迫る。

「なあ俺たちと地球を支配しようぜ、イレギュラー?」

「……………確かに俺は最初身の抛り所がほしくてあいつらと共にいた。……………だがな、」

切な俺の胸の水晶が輝きを放つ。

「あいつらはもう俺の大切な仲間だ!俺は絶対に仲間を裏切らない!!!メーザーストームフルパワー!!!」

「何い!?!グアアアアアアア!!」

俺は目が覚めてからずっとチャージしていたメーザーストームを放つ。俺の正面にいたフアントムジョーは他の奴らを巻き込んで盛大に吹き飛んだ。

「トランスフォーム!!!でえい!」

俺はトランスフォームして洞窟の出口に飛ぶ。



「くそっ！逃がすな追ええ！トランスフォーム！！」

「トランスフォーム！！」

奴らはビークルモードになって俺を追いかけてくる。俺は出口の手前で止まりトランスフォームする。

「トランスフォーム!!!フフフ、とうとう観念したか？」

「いや、違うね！テールショット!!!」

俺は洞窟の天井に向けてテールショットを連射する。すると洞窟はゴゴゴゴとゆれて天井の岩が崩れ落ちてくる。

「何い!？」

「うそん!？」

「マジイ!？」

「トランスフォーム!!!じゃあな！」

俺はトランスフォームして洞窟から脱出する。

「おのれええええええゲルシャークうううううう!!!」

ファントムジョーの言葉を最後に洞窟は完全に崩れた。速くバンブルビーたちのごとく向かわないと、俺は急いで飛んで行った。それとあいつの言っていたイレギュラーという言葉、やつは一体……

## 相棒!?

あの後、フアントムジョーたちを命からがら退けて基地に戻った時にはすっかり夜になっていて、すでに向こうの事件は終わっていた。

何でも、スチールジョーの手下のダニ型テイセプティコンのミニトロンがグリムロックに取りついて、グリムロックの体を操作していたらしい。何とかミニトロンを捕獲することはできたが、代わりにアンダーバイトの收容されたポットが奪われてしまったそうだ。

だが、悪いことばかりじゃない。今回の件で活躍したグリムロックは正式にオートポットのエンブレムを入れてもらい、それに伴いスワープとフィルチの二人もオートポットのエンブレムを入れて貰ったようだ。ちなみに俺はデストロンガーのエンブレムのままでいる。何だかんだでこのマークが気に入っているのだ。

「さて、この辺だな」

そんな俺は現在、デイセプティコン信号を追いかけてパトロール中である。ビーストモードで飛んでいると、下に收容ポットを発見した。

「あれだな、トランスフォーム！」

トランスフォームして地面に降り立ち、ポットに向かう。案の定、ポットは開いており、中にデイセプティコンはいなかった。

「ポットの大きさが小さいな……マイクロンか？取り敢えずフィクシットに連絡を……つてうお!!」

ポットを調べていたその時、突然何か飛んできた。俺はとっさにそれをかわし、それを見る。

「なっ!?!手裏剣!?!」

それは盾ほどの大きさもある巨大な手裏剣だった。手裏剣ははるか後方に飛んでいったと思ったら、なんと途中で方向転換してこちらに戻ってきた。

「いやブーメランかよ!テールショット!!」

俺は飛んできた手裏剣にレーザーを放ち、手裏剣を打ち落とす。すると手裏剣は変形し、牛型のロボットになった。

「トランスフォーマー?やはりマイクロンか!」

「ブルルルル!バロツ!」

マイクロンはうなり声を上げた後逃走した。

「逃がすか!」

俺はマイクロロンを追いかける。少しずつ距離を縮めて行き、うしろから飛びかかった。

「そら捕まえた!」

「ブロー!バロツ!バロツ!」

マイクロロンは逃れようとめちやくちやに暴れ、取り押さえようと力を込めるのだが、思いの外力が強く、そこから中を転げ回ってしまい、ついには段差になった場所から落ちてしまった。

「~~~~いってえ……………あれ?あいつは何処に……………つて、うお?」

落ちた拍子にマイクロロンを見失ってしまい、逃げられたのかと辺りを見渡そうとする。と右腕に違和感を感じる。ふと見てみると、マイクロロンが手裏剣の状態で俺の右腕に装着されていた。すると、何やらマイクロロンの意思のようなものが頭に流れてきた。

「……………へえ、そうか。バロツっていうのか、お前。」

『ブルルルル』

「なるほど、ディセプティコンとパートナーを組んでいたけど相手に不満があつて離反した所を捕まったのね」

装着した影響か、さつきまで唸り声にしか聞こえなかったマイクロロン、バロの言葉がなんとなくではあるが理解できた。

『バロツバロバロ!』

「俺なら主人にふさわしいって?何を根拠に」

『バロロロ』

「なんとなく……ねえ。ま、いいさ。ここであつたのもなんかの縁だ。よろしく頼む  
ぜ、バロ。」

『バロ!』

こうして俺は、パートナーマイクロンのバロを手に入れたのだった。

## 硝煙

どうも、毎度お馴染みゲルシャークです。現在俺はスワープとフィルチの二人と共にバンブルビーたちと別行動でデイセプティコン信号のあった遺跡に訪れていた。試しに壁に触れると、触れた部分がぼろぼろと崩れる。

「この遺跡は酷く風化している。崩れないように注意しないと」

「クアア、了解」

「あーい」

そうやって俺たちは廃墟に入ろうとする。

ブロロロロロロ!!!

すると、後方からエンジン音が聞こえてくる。振り向くと、黒いスポーツカーがこちらに向かって走って来た。ボンネットにはでかでかとデイセプティコンマークが刻まれている。

「トランスフォーム!!!」

案の定そいつはトランスフォーマーで、ロボットモードへと変形する。アルケモア号

の囚人では珍しいヒューマンタイプだ。

「ダイノボットとカラスとサメが三匹、このラナバウト様の根城になんの用だ？」  
黒いトランスフォーマー、ラナバウトが訪ねる。

「悪いが、お前を捕まえに来た。おとなしく投降してくれと、助かるんだが？」  
俺はそう言つてアンカーアームを構える。二人も臨戦体勢に入った。

「投降しろだあ？バカ言っちゃいけねえ。お前らに捕まる俺様じゃねえつてことよ！  
喰らえ！」

そう言つてラナバウトはバックパックから何かを取りだし投げつける。それは爆音  
とともに強烈な光を放つ。

「うわっ！スタングレネードか！」  
光が止むと、ラナバウトの姿は既になかった。

「くそっ！外に走り去った形跡はない、奴は廃墟の中だ！追うぞ！」  
「了解！」

俺たちは遺跡の中へと入って行つた。

~~~~エンブレムターン~~~~

中に入ると、そこはまるで迷路のようになっていた。暫く進んでいると、大きく開けた空間があり、そこでなにやら話し声のようなものが聞こえる。

「近づいてみよう」

みると、そこには緑色のカエルのロボットが、なにやら柱のレリーフに向かって話しかけていた。おいおい、またディセプティコンかよ。

「ドラドスはこの近くケエ？答えるケロよ！正直にいうケロよ。アツシは招待されたんだケロよ〜」

カエルはなにやらそんな事を喋っている。ドラドス？

「スプリングロード！あなたを逮捕するわ！」

するとそこにストロングアームが現れ、そのカエルのロボットをつかむ。しかしストロングアームは「キヤツ!」と悲鳴を上げて手を話した。

「ゲロ！宝探しをジャマし続けるなら、また火傷させてやる！とつとと失せるゲロオ！」

そう言ってカエルは後ろ足でストロングアームを蹴り飛ばし、壁に叩きつける。

「大丈夫か!？」

すると柱の影からバンブルビーがストロングアームに駆け寄る。

「溶けてる…やつの身体は強い酸で被われているようです……」



「バンブルビー、加勢するぞ！」

俺はそう言つてカエルの前に飛び出す。

「ゲルシャーク!?! どうしてここに!?!」

「別のデイセプティコンを追つててな、偶然立ち寄つたのさ。さて、どうするよカエルさん？」

俺はアンカーアームをカエルに向けて言う。

「ゲロゲロオ！誰だろうとアツシのジヤマをするやつは、みんなやつつけるケロよ！  
グエエエ」

カエル……もとい、スプリングロードは喉を膨らませ牙を剥き出しにしてうなる。

「……………やれやれ、恐竜、カラス、サメと来て今度はカエルかよ。つたくどいつもこいつも俺の縄張りで好き勝手しやがって」

すると奥の暗がりから声がある。徐々に足音が近づいて来て、ラナバウトが姿を表した。

「ま、いいや。お前ら全員、ここで死ぬ。」

そう言つてラナバウトは何かのスイッチを押す。するとドカアン!!と爆音が鳴り響き、壁や天井にひびが入り、グラグラと地鳴りが響く。

「ククク……この広間の四方の柱の根本には俺の小型爆弾が設置してある。このス

イツチですべての爆弾が起動し、広間は倒壊。中の奴等は皆生き埋めだ！

じゃあな。トランスフォーム!! ハーハッハッハッ!!」

ラナバウトは笑い声を上げて走り去った。

「ゲロゲロオ! アツシはドラドスを探すため、どんなピンチも乗り越えてきたケロ! お前から見たいなぼんくらは助からないケロ! ハッハーいきみだケロー!」

そう言い残してスプリングロードは跳び跳ねて行った。

「不味い、このままじゃ!」

「みんな! 柱を支えるんだ!」

「駄目だ! 根本から破壊されている!」

バンブルビーの指示に柱を確認したスワープがNGを出す。不味い不味い不味い! このままでと全員生き埋めだ!

「隊長! スプリングロードは壁に空いた穴から逃げました!」

ストロングアームが叫ぶ。壁に穴…そうか!

「それだ! ビーストモード!」

俺はビーストモードに変形する。

「ゲルシャーク、どうするつもりだ!」

「こうするんだ! シャークトロープード!!」

俺は口から魚雷を放ち、壁に穴を開ける。

「逃げるぞ！穴に飛び込め！」

俺の声に反応し、近くにいたスワープたちが穴に飛び込む。バンブルビーたちも飛び込んだところで、俺も穴に向かうが、天井から落ちた岩に阻まれ、そのまま広間は安全に倒壊した。

「そなたっ!? ゲルシャアアアアアアアアアアアク!!!」

## 候補生の心

ガガガガガッドーン!!!

瓦礫の中から何かが削れるような音がしたと思うと、大きな音を立てて瓦礫が吹き飛んだ。土煙が晴れると、そこにゲルシャークの姿があった。

「ゲルシャーク！無事だったのかー！」

バンブルビーがゲルシャークに駆け寄る。

「どうやって助かったんだ?！」

「ああ、こいつのおかげだよ」

そう言ってゲルシャークは左手を挙げる。そこには、アンカーアームの上にドリルモードになったパートナーマイクロンのバロが装着されていた。

「まず、手裏剣モードのバロを盾代わりにして瓦礫の直撃を防ぎ、次にドリルモードに変形したバロをアンカーアームと連動させて瓦礫を吹っ飛ばしたって訳だ。ありがとな、バロ。」

「バロッー！」

バロは一鳴きするとドリルから手裏剣に変形しゲルシャークの右腕に装着する。

「ゲルシャーク、無事で何より……」

「ム！」

「あう……」

ストロングアームがゲルシャークに声を掛けようとするが、バンブルビーに睨まれて言いとどまる。

「君が勝手に突っ走ったせいで待ち伏せ作戦はもう使えない！ゲルシャークたちの追っていたディセプティコンも含めて短期決戦しかない。仲間を待つてる余裕もないぞー！」

「……どのみち彼らは来ません。あの後、フィクシットに応援は要らなくなったと言ってしまったんです。スプリングロードを逃がしたくなかったので……」

「何だっ!?」

バンブルビーは声を上げて振り替える。

「君は軽はずみな行動をした上に、上官である俺に嘘をついていたのか!?後一步間違えばゲルシャークが、仲間が生き埋めになる所だったんだぞ!」

「ストップ、ストップ!!」

ヒートアップするバンブルビーにゲルシャーク割って入る。

「バンブルビー、俺のために怒ってくれるのは嬉しいが、今はそれどころじゃないだろ？」

「クアア、一刻も早くスプリングロードとラナバウトを捕まえないといけない。」

「ゲルシャークに続いてスワープも彼を説得する。」

「それに、少しはストロングアームの気持ちを酌んでやったらどうだ？こいつはな、早く見習いを卒業して一人前になりたいんだよ。お前にだって解るだろ？上官に認めて貰いたい気持ちが」

「ム……」

ゲルシャークに指摘され、バンブルビーは唸る。かつてオプティマスプライムとともにいた時のことを思い出したからだ。

「お願いです隊長！もう一度だけチャンスを下さい。必ずかたをつけるので見守っていて欲しいんです！もう無謀な真似はしませんから！」

ストロングアームの真剣な申し出を聞いて、バンブルビーはじつと彼女の目を見る。

「……一度だけだぞ」

バンブルビーはそう言つて遺跡の奥へ進んで行った。

「ツ……ありがとうございます！」

「クアア、急ぐぞ」

「は〜い、ダーリン♥」

スワープとフィルチも遺跡を進んで行き、ゲルシャークもそれに続く。

「……ありがとう、ゲルシャーク」

ストロングアームが呟いた一言が届いたのかはわからないが、ゲルシャークはニヤリと微笑んだ。

#### ◆エンブレムターン◆

「教えてケロ、ドラドスの守護神たちよ！一生のお願いケロ！失われた都市は何処にあるんだケロ！」

遺跡の奥の広間で、スプリングロードは石像に必死にドラドスの有りかを問いかけていた。

「うるっせーなさつきから！なんだてめえは!!人のアジトでワケわからんこと喚きやがって！」

するとそこスプリングロードの声を聞き付けたラナバウトが表れた。

「ゲロ!?!何者ケロ!?!」

スプリングロードは飛び上がって話しかけて来た方へ振り向く。

「ああ？俺はラナバ……」ゲロ！さては遺跡荒らしケロ!?!あつしからドラドスへ行き方

を横取りするつもりゲロね！」ってテメエ人の話を聞きやがれ！ってかドラドス？何言ってるんだおめえ？ドラドスなんてただの伝説だろ？そもそもここはサイバトロン星じゃ……」

「問答無用ゲロ！アチョー!!」

「ぐおお!!?」

スプリングロードは喋りかけのラナバウトに飛び蹴りを食らわせ、それをまともに受けたラナバウトは吹き飛び壁にぶつかる。

「てってめえ……もう許さねえ！ディセプティコンのテロリストにして爆発物取り扱いスペシャリストのラナバウト様をなめんなよ!!」

ラナバウトは拳銃を取り出しスプリングロードに乱射する。

「ゲロツ！ゲロツ！そんなもん当たらないケロ！ペロリンチョー！」

スプリングロードは壁や天井を飛び回り弾丸をかわし、長い舌を伸ばしラナバウトの拳銃を弾き飛ばす。

「ゲーロゲロゲロゲロリンチョー！お前みたいなのがボンクラに負けるあつしじゃないケロ！」

スプリングロードはあかんペーをしてラナバウトを馬鹿にする。

「て、テンメえ……!!調子にのんじゃねええええ!!」



ラナバウトは怒号を上げると背中の中のバックパックから巨大なロケットランチャーを取り出した。

「ゲロ!? どうやって出したケロ!? お前ネコ型ロボットだったのケ!」

「んな訳あるか!! 俺のどこをどー見たらネコじゃ!? 俺のバックパックはトランスワーブチャンネルで俺専用の武器庫に繋がってんだよ!」

ラナバウトはロケットランチャーをスプリングロードへ向ける。

「ッ!? ゲロやばっ! トランスフォーム!!!」

スプリングロードはピックアップアツプトラックに変形して慌てて走り去る。

「待てやこのカエル野郎!! ケツに爆竹振じ込んで唐揚げにしたらあああああああ!!!」

### ◆エンブレムターン◆

「やつはこっちに向かったはずだ」

バンブルビーたちは逃げ去ったスプリングロードの後を追っていた。

ブロロロロロ!!!

すると前方から車のエンジン音が聞こえてくる。一同が奥に目を向けると、緑色の

ピックアップトラックがこちらに走って来た。

「ケロツ、ドラドスよ！何であつしを苦しめるんだケロ!?」

「悪いけど、ドラドスは今出掛けてるの。伝言があれば聞くけど?」

ストロングアームが皮肉を効かせてスプリングロードに話しかける。

「ケロケロ!?まさかそんな、あり得ないケロ!生き埋めになったはずケロ!?」

スプリングロードはストロングアームたちを見て驚愕する。全員瓦礫の下敷きになつてお陀仏になつていいると思つていたからだ。

「もしかして……お化け?そうケ?ポンクラどもは死んでもあつしの邪魔をするつもりケロ!?ハハハハ!!そうはさせるケツ!!」

おかしな勘違いをしたスプリングロードは大きくジャンプしてゲルシャークたちを飛び越し壁に張り付く。

「トランスフォーム!!!バイバイケロー!」

スプリングロードは再びビークルモードに変形して走り去る。

「逃がさないわよ!トランスフォーム!!!」

ストロングアームとバンブルビーはビークルモードに変形してスプリングロードを追いかける。

「まあああてえええやああああああああああ!!!」

すると今度は、目を血走らせ全身に重火器を担いだラナバウトが銃を乱射しながら走って来た。

「なっなんだあ!?!」

「カエルウウウウウ!!! ぜえつたいに逃がさねええええええええ!!!」

「ツ!? やつべえみんな逃げろ!!」

面食らったゲルシャークたちだが、すぐに我に帰り全力で逃亡する。おかしなおいか  
けっこが始まった。